

負傷動物の搬入状況と疾病

動物愛護センター

今村 睦 及川悦子 斉藤富士雄 中村和夫

1 はじめに

動物愛護センターは、平成12年4月より、「負傷した犬ねこ等の動物の取扱要領」に基づき疾病にかかり若しくは負傷し、保健所で保護、収容された動物(以下負傷動物とする)の治療及び処置を行っている。搬入された負傷動物のほとんどは、交通事故を原因とし、救急の処置を必要としている。迅速かつ適切な治療を行うために、負傷動物の病状や治癒の傾向を把握することは重要と思われる。

そこで今回、負傷動物の搬入状況とその疾病について検討したので報告する。

2 材料及び方法

平成12年4月から平成14年1月までに、県内で保護、収容され、当センターに搬入された負傷動物68頭(犬46頭、猫21頭、アヒル1羽)について調査した。

3 成績

(1) 負傷動物の搬入・引継状況(表1)

負傷動物の搬入頭数は、犬46頭、猫21頭で犬が猫の2倍以上であった。飼主への返還頭数は、犬7頭、猫1頭で、猫は少なく、全体の返還率は11.8%であった。搬入後の死亡頭数は、犬5頭、猫5頭で、全体の死亡率は14.7%であった。譲渡頭数は全体で31頭(犬27頭、猫3頭、アヒル1羽)、譲渡率は45.6%であった。保健所からは19頭(うち軽井沢町の多頭飼育の保護犬を15頭含む)が譲渡され、当センターからは12頭が譲渡(または譲渡待ち)された。

また、住民が負傷動物を当センターに直接持ち込む事例が6件あった。

表1 負傷動物の搬入・引継状況

	犬	(%)	猫	(%)	アヒル	(%)	計	(%)
搬入頭数	46	(100)	21	(100)	1	(100)	68	(100)
返還頭数	7	(15.2)	1	(4.8)			8	(11.8)
死亡頭数	5	(10.9)	5	(23.8)			10	(14.7)
引継頭数	6	(13.0)	10	(47.6)			16	(23.5)
引継後譲渡頭数	27	(58.7)	3	(14.3)	1	(100)	31	(45.6)
(保健所から)	(17)		(1)		(1)		(19)	
(センターから)	(10)		(2)				(12)	
治療中頭数	1	(2.2)	2	(9.5)			3	(4.4)

(2) 保健所別・地区別搬入状況

負傷動物の保健所別搬入頭数は(表2)、犬、猫とも佐久からの搬入が一番多く、犬35頭(76.1%)、猫18頭(85.6%)で、全体では53頭、77.9%を占めている。

市町村別では、軽井沢町が22頭(犬18、猫4)、小諸市が18頭(犬11、猫7)、佐久市が8頭(犬4、猫4)で上位を占め、3市町の合計で、48頭、70.6%を占めている。

表2 保健所別搬入頭数

地区	保健所	犬	(%)	猫	(%)	アヒル	(%)	計	(%)
東信	佐久	35	(76.1)	18	(85.6)			53	(77.9)
	上田	3	(6.5)					3	(4.4)
北信	長野	3	(6.5)	1	(4.8)			4	(5.9)
	北信	1	(2.2)					1	(1.5)
中信	大町	1	(2.2)	1	(4.8)			2	(2.9)
	木曾	1	(2.2)					1	(1.5)
南信	伊那	2	(4.3)					2	(2.9)
	諏訪					1	(100)	1	(1.5)
その他				1	(4.8)			1	(1.5)
合計		46	(100)	21	(100)	1	(100)	68	(100)

(3) 負傷動物の種類及び性別

犬では、雑種がほとんどで、42頭(柴系 27 頭、マルチーズ系 15 頭)、91.3%を占め、その他は、シーズー犬3頭、紀州犬1頭、柴犬1頭であった。猫では21頭すべてが雑種であった。

性別では、犬猫共に雄雌の片寄りはなかった。

(4) **負傷動物の首輪装着状況**

首輪の装着状況は、犬で18頭(39.1%)、猫では1頭(4.8%)であった。

この猫の首輪の裏には名前と電話番号が記入しており、猫では唯一飼い主に返還された1例であった。

(5) **搬入時の症状と疾病の状況**

負傷犬の搬入時の症状(表3)は、後駆麻痺が11頭、衰弱が8頭、眼病が8頭、跛行が7頭と多く、X線検査後は、骨折脱臼が17頭(37.0%)を占めた。主な疾病として、胸椎腰椎の骨折脱臼、大腿骨や骨盤の骨折、股関節脱臼、結膜炎、化膿性外耳炎が多かった。

表3 負傷犬の症状別・疾病別頭数

症状別	頭数	(%)	主な疾病
後駆麻痺	11	(23.9)	骨折脱臼 17 頭: 胸椎腰椎骨折脱臼(10)、大腿骨骨折(3)、骨盤骨折(2) 股関節脱臼(2)、上腕骨骨折(1)、橈骨骨折(1)、脛腓骨骨折(1)など
跛行	7	(15.2)	
創傷	5	(10.9)	創傷 6 頭: 頸部首輪の圧迫(1)、咬傷(1)、両後肢裂傷(1) など
衰弱	8	(17.4)	
眼病	8	(17.4)	結膜炎(6)、巨大眼球症(1)、白内障(1)
耳病	5	(10.9)	化膿性外耳炎(4)
皮膚病	2	(4.3)	皮膚炎(2)
合計	46	(100)	

負傷猫の搬入時の症状は(表4)、創傷が7頭、衰弱が6頭、後駆麻痺が4頭、跛行が3頭と多く、X線検査後は、骨折脱臼が7頭(33.3%)であった。主な疾病は、裂傷、胸椎腰椎の骨折脱臼、骨盤骨折が多かった。

また、搬入時の血液検査で、猫白血病ウイルス(FelV)陽性が1頭、猫免疫不全ウイルス(FIV)陽性が2頭認められた。

表4 負傷猫の症状別・疾病別頭数

症状	頭数	(%)	主な疾病
後駆麻痺	4	(19.0)	骨折脱臼 7 頭: 胸椎腰椎骨折脱臼(2)、骨盤骨折(2)、大腿骨(1)、 中足骨(1)、足根骨(1)、
跛行	3	(14.3)	
創傷	7	(33.3)	裂傷(4)、咬傷(1)、虐待(目の外傷・歯に針金)(1)
切断	1	(4.8)	両後肢・尾切断(1)
衰弱	6	(28.6)	横隔膜ヘルニア(1)
合計	21	(100)	

(5) **治療後の経過**

犬では、後駆麻痺11頭のうち10頭には胸椎または腰椎の損傷があり、脊椎の変位が大きいものは予後不良であったが、変位が小さいものは、歩行まで回復した。

犬、猫ともに、重度の衰弱や内臓の損傷を伴ったもの以外は、治療後回復している。

軽井沢の多頭飼育犬のうち15頭が、結膜炎、外耳炎、皮膚炎、腫瘍、衰弱で搬入された。妊娠していた雌3頭の避妊手術、1頭の腫瘍切除も含め、すべて治療後回復し、保健所に引き継ぎ後譲渡された。

右足を骨折していたアヒルは、歩行可能まで回復した。

(6) **負傷の原因**(表5)

負傷動物の状態から、負傷の原因を推測したところ、犬、猫ともに、交通事故が多くを占めていた。

猫では、虐待によると思われるものが1頭いた。

表5 負傷の原因

犬の負傷原因	頭数	(%)	猫の負傷原因	頭数	(%)
交通事故	17	(40.0)	交通事故	13	(61.9)
多頭飼育	15	(32.6)	他けが病気	7	(33.3)
放浪犬	14	(30.4)	虐待	1	(4.8)
合計	46	(100)	合計	21	(100)

4 まとめ

負傷して搬入される動物の多くは、交通事故を原因とし、死に至らず、後駆麻痺や衰弱などで動くことができずに、通報、収容されたものである。今回調査した結果でも、脊椎、骨盤、大腿骨に骨折脱臼など大きな損傷を受けているものが多く、内臓損傷、敗血症、ショックなどを伴い衰弱しているものは、搬入時や翌日に死亡する場合もある。病状に合わせた、迅速な応急処置が必要である。

負傷犬はほとんどが飼い犬であり、放し飼いや迷子などが事故に繋がっている。飼主が首輪に鑑札の装着や名前を記入し、責任を持って飼育することで負傷する事例も減少すると思われる。

また、負傷猫はほとんどが野良猫、外猫であるが、飼い猫も含まれており、室内飼いや首輪装着、名前の記入により、事故からの回避や返還されるケースも増えると思われた。

参考文献

- 1)新井英人ら：第 79 回東京都衛生局学会(1987)
- 2)原樹子ら：第 79 回東京都衛生局学会(1987)